

龍谷大学世界仏教文化研究センター 2016年度公開研究会

2017年1月22日(日) 学術講演会

「華嚴の世界—『華嚴経』と南方マンダラー」関連レクチャー

講演名	南方熊楠とは何者か？
開催日時	2016年10月14日(金) 13:15~14:45
場所	龍谷大学深草学舎和顔館アクティビティホール
講演者	唐澤太輔 (龍谷大学世界仏教文化研究センターPD)
司会	亀山隆彦 (龍谷大学世界仏教文化研究センターRA)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター
参加人数	26人

【講義のポイント】

哲学・倫理学が専門の唐澤太輔氏による、^{みなかたくまぐす}南方熊楠(1867-1941、博物学者、民俗学者)の生涯に関する講演。「知の巨人」などとも称される熊楠の「人となり」に関する講演が行われた。難解な「南方マンダラー」の思想についても図を用いてわかりやすく解説がなされた。

【講義の概要】

■ 研究動向

唐澤氏は、最初に、鶴見和子氏(社会学者)の『南方熊楠—地球志向の比較学—』(1978年)以降、南方熊楠に関する研究には二つの潮流があることを、武内善信氏(日本近代史研究者)の言葉を引きながら解説した。一つは、実証的「熊楠研究」であり、もう一つは「熊楠論」である。前者の代表は、松居竜五氏(比較文化学者)の『南方熊楠—一切智の夢—』(1991年)であり、後者の代表は、中沢新一氏(思想家・人類学者)の『森のパロック』(1992年)であるという。また、現在、南方熊楠顕彰会を中心に、実証的な熊楠研究が非常に盛んに行われていることが述べられた。

■ 和歌山・東京

以上の研究動向を踏まえ、次に、熊楠の人生について述べられた。熊楠は、少年期に『和漢三才図絵』という江戸時代の大百科事典を書き写したという。そんな熊楠の少年時代のあだ名は「てんぎゃん(天狗)」である。高い鼻と鋭い眼光を持ち、また人間にはない知識と予知

能力を備えている山中の妖怪である天狗(てんぎゃん)は、まさに熊楠にぴったりのあだ名だった。

熊楠は、東京大学予備門時代、成績不振により落第し、さらに酷い頭痛にも悩まされ、結局退学を余儀なくされた。和歌山に帰省した熊楠は、羽山繁太郎・蕃次郎兄弟という人物たちと深く交友を結んだ。二兄弟は夭逝するが、熊楠は、彼らのことを生涯忘れることはなかったという。

■ アメリカ・キューバ

アメリカへ渡った熊楠は、立て続けに二校もドロップアウトし、キューバへ生物採集旅行へと向かった。キューバでは、サーカス団員とも親交を持ったようだ。「キューバ独立戦争に参戦して胸に盲管銃創を受けた」などというのは、いわゆる「熊楠伝説」であり、事実ではない。この他にも多くの「熊楠伝説」が残っている。例えば、ロンドンで大使館に幽閉されていた孫文を夜な夜な忍び込んで救出した」などである。唐澤氏は「熊楠伝説」が真実のように語られてきたのは、熊楠がそのような伝説に相応しい人物であり、そのような壮大な「伝説」も本当かと思わせてしまうほどの人間的魅力があったからだと述べた。

■ ロンドン

アメリカにおいて、熊楠の知的好奇心は満たされることはなかった。熊楠は、当時の学問の中心地であったロンドンへ渡る。亡き父に誓うように、熊楠は、日記の見返しに「学問と決死すべし」と記した。「東洋の星座 The Constellations of the Far East」が、科学雑誌『ネイチャー』に掲載され、大英博物館で書籍を貪るように読みあさり筆写していた熊楠であったが、ある時大きな事件を起こしてしまう。大英博物館内で、自分を侮辱する英国人を殴ってしまったのである。熊楠は、平等であるはずの学問の場で、アジア人ということだけで侮辱を受けることだけはどうしても我慢ならなかったのである。結局、熊楠は、大英博物館を追放された。日本からの仕送りも滞りがちになった熊楠は困窮し、遂に1900年9月、帰国する。

■ 那智

帰国した熊楠は、那智山にいんせい隠栖した。この時期、熊楠は、真言僧・土宜法龍(1854-1923年)宛書簡に、後に「南方マンダラ」と呼ばれるようになる図を書き表した。唐澤氏によると、この図は、極めて思想性が高く、また華嚴思想の影響を受けているという。「南方マンダラ」の主要素は「心不思議」(心理学の研究領域)「物不思議」(物理学などの研究領域)「事不思議」(心と物とが交わる領域)「理不思議」(自己と他者、現実世界と根源的な場との通路)「大不思議」(全てを包みこむ場)であるという。

熊楠の頭脳は、那智隠栖期に「灼然と上進し」た。「灼然」とは「輝くさま」を表し、まさにそれは熊楠にとって「星の時間」(中沢新一『熊楠の星の時間』2016年講談社)であった。

■ 田辺

約三年に及ぶ那智隠栖期を経て、熊楠は田辺に定住する。そして神社合祀反対運動に全精力を注ぐことになる。熊楠は、自然の風景・生態系は曼陀羅のように複雑に絡み合っていてできおり、ひと時の利益の

ためにそれを破壊してはならないと強く主張した。そして「エコロジー」という言葉を用い、神社合祀の中止を訴えた。

熊楠は、柳田國男(1875-1962年)と民俗学研究で活発に書簡のやり取りを行ったが、結局「性」に対する認識の違いなどから、二人は決裂してしまったという。

粘菌研究においては、熊楠は生きた柿の木から新種「ミナカテルラ・ロンギフィラ(南方の長い糸)」を発見している。当時は、粘菌は朽木に生息するというのが「常識」であった。つまり熊楠は、その「常識」を覆したのである。

熊楠の民俗学上における論考は多々あるが、その多くは、自由闊達とも言えるし、まとまりがないとも言えるものばかりである。また各論考は、中途半端に終了してしまっていることが多い。しかし、それがまさに「南方熊楠」なのである。

■ 晩年

熊楠の人生における「ハレの日」は、1929年6月1日の昭和天皇へのご進講であった。その日、熊楠邸の庭には紫色のオウチの花が咲き誇っていたという。熊楠は亡くなる直前、天井に紫色の花の幻覚をみた。熊楠の死後、彼の脳髄は解剖され大阪大学医学部に保存されることになった。

【まとめ】

極めて多岐に渡って活躍した南方熊楠の人生は、「普通」や「常識」という言葉がまったく似合わない。何者かを一言で語ることは難しい。柳田は熊楠を評して「日本人の可能性の極限」と言った。この言葉は、第二次世界大戦に敗戦した日本がこれからどのように生き延びていくかという時期に述べられたものである。最近よく言われるように、3.11を「第二の敗戦」(田原総一郎)だとするならば、我々は今こそ、「日本人の可能性の極限」とは何かを、熊楠の人生と思想を通じて、もう一度考えるべきではないだろうか。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターPD 金澤豊